

# 揖保川流域委員会

## 第5回 流域社会分科会・情報交流分科会(合同開催) 議事録(概要)

日 時：平成15年9月25日(木)9:00~12:00

場 所：ホテルサンガーデン姫路 3F 光琳の間

出席者：委員10名、河川管理者2名、傍聴者30名

### 1. 揖保川の維持・管理に関する情報提供

河川管理者より、揖保川の維持・管理に関する現状説明が行われました。

### 2. 提言に盛り込む内容について

8月に実施された第4回流域社会・情報交流分科会(合同開催)、第4回治水・利水・自然環境分科会での審議結果を受けて、委員が分担して修正した「提言のたたき台(H15.9.30版)」について審議が行われました。

今回の分科会で出された意見を踏まえて提言のたたき台を修正し、次回は委員会で審議することとなりました。

委員からの主な発言(提言のたたき台の内容は分科会資料を参照)

( )内の「No. 」は、分科会資料中の整理番号を示す。

#### 「 1. 河川整備に対する基本的な考え方」について

##### (1)「3. 自然環境に対する考え方」

水質環境について「A類型」「AA類型」といった記載があるが、これらの専門用語には補足説明があるということでしょうか。

(庶務による説明)執筆担当委員に相談し、難しい言葉、専門用語は注釈をつける方向で準備中である。

##### (2)「4. 流域社会との関わりに対する考え方」「5. 流域の情報交流に対する考え方」

各項目の見出しに「かわづくり」という言葉が出ているが、漢字で「川」と書いたほうがよいのではないかと。

すべての項目の見出しに「かわづくり」とあるが、これは川づくりについての計画書なので、あえて「かわづくり」と入れなくてもよいのではないかと。

流域社会分科会のまとめ(第6回委員会資料)には、流域社会との関わりについてもっと他の内容があったと思う。水循環システム、揖保川流域のそれぞれのまちの活性化、まちづくりと川との関係、商店街と川を結ぶことによる商店街の活性化等、揖保川を大きな軸としてその支川の水環境をネットワーク化したまちづくりについての内容がもっと含まれていたのではないかと。

それぞれの地域で川の調査をしたり、研究したりしているグループがあるが、近隣の地域や上流・下流で交流をしたということは聞かない。それぞれの地域の川づくりの団体や活動を結んだネットワークをつくることも提言できるのではないかと。

『知水』のための情報交流(No.214)の項では上流・中流・下流ということが非常に意識されており、まちづくりにおいても、上流・中流・下流の連携を考える必要がある。例えば市川流域では、生野銀山への馬車道が川沿いに走っていたということがあり、市川流域ならではの上流・中流・下流のまちづくりがうまく展開していけばよいと思う。そのような発想で、揖保川流域だからこそ提案できることを「まちづくりと連携するかわづくり」の中に入れたほうがよい。

揖保川の場合、古墳が流域の下流から上流まで全域に点在し、古代から人が住む豊かな地域であった。例えばそういう歴史遺産を現代に生かしていくという視点を具体的に書けば説得力があるのではないか。

下流域は、姫路市と合併して以来、龍野市や揖保郡との連携が少なくなり、姫路市を中心とした生活により揖保川流域から離れてしまったのではないかと感じている。行政区域の意識はどうしてもあるが、揖保川流域の文化・歴史があるのだということを尊重していただきたい。

「 . 整備計画のあり方 - 5 . 連携による一体的な流域管理」について

学校教育にとどまらず地域全体の「学習の場」という言葉が、提言のたたき台に入っている。地元の高校で地域の勉強会を行っており、それぞれの分野の有識者に講師をお願いしているが、揖保川の話をしてほしいと言われた場合、なかなか講師が見つからない。現在は、そういう面で非常に不自由している。

地域の活性化、経済の活性化という側面から見ると、企業が河川整備に参加する機会も必要で、提言の中に「企業」という言葉を入れ、意識を高めてほしい。例えば、グラウンドワークにより市民・企業・行政三者のパートナーシップで公園づくりや河川づくりを行っている先進事例が静岡県三島市などにあり、企業から協賛金を募ったりしている。将来的に、揖保川やその支川でこのような活動を行う場合に、企業が重要な立場になってくると思う。表現としては「企業」の代わりに「事業者」という言葉を使うこともある。

「直轄管理区間より上流部の河川や水源地帯、支川を含めた、流域の一元的な管理を実現する」(No.503)という文章があり、これについて国、県、市町の河川、上下水道、農林、水産、都市、道路というような言葉で網羅してあるが、直轄管理区間外のことについて流域委員会であまり討議を深めてこなかったのではないかと思う。波賀町は町域全部、一宮町も上流部ほとんどが国の直轄管理区間外であり、河川の一括した管理体制というものを提言の中のできるだけ具体的に盛り込んでほしい。一宮町、波賀町を取り巻く山々はすべて1000mを超えており、管理上の問題がいろいろあると思うので、揖保川流域として考え、管理体制を整えてほしい。

河川工事を行うのは国土交通省、県、市町と分かれているが、河川の工法なども含めた情報交換などはしているのか。

(河川管理者による回答)揖保川全体としての整備の考え方について情報は共有している。この考え方に基づき、それぞれの区間でそれぞれの目標に応じて適切な工法を採用している。

「 . 整備計画策定時の住民意見反映のあり方」について

No.602に、上流、中流、下流の相互理解ということが書いてある。上流とは水を与える側、中流とは水を利用する側、下流とは水を終末処分するところという感覚を持っているが、このような感覚や、ものの考え方というのは必ずしも同じではない。一本で物事を考えてほしいと言われても、住民の側はそうでないということを心にとどめてほしい。

今回の河川整備計画策定後の「ポスト整備計画」についても、やはり住民意見を把握し、その後の改修計画あるいは地域づくりに反映していく必要があると思う。章の中で、そういうことについても言及していったほうがよいと思う。

章では地域住民のことを中心に書いているが、この中に自治体の考えを地域の考えとして反映させるということも入れていけばよいのではないか。

「 . 整備計画のあり方 - 1 . 治水 2 . 利水 3 . 自然環境 4 . 河川空間の利用」について

地元のまちづくり協議会の中では畳堤に対する関心が高まっており、今の畳のサイズと合っていないという問題や、畳の数の確保についての意見が出ている。赤とんぼ文化ホール(揖保川防災ステーションとの複合施設)にかなりの数の畳が用意しており、左岸側の問題はほぼそれで解決すると思うが、右岸側の畳の準備は全くできていないといってもよいのではないかという心配が住民からも出ている。ところが、この提言では「畳堤の洪水制御機能を過

剰に期待しては危険」、あるいは「水害に対する龍野地区の考え方を表示する一つのモニュメントであり」となっており、水防の機能を期待してはいけないともとれる表現になっている。このあたりをどのように理解したらよいか明らかにしてほしい。

畳堤は治水効果があったから、これが今の時代にも受け継がれてきたということだと思う。畳堤がない場合、堤防を高くしなければならず、そうすれば、ますます川が地域住民から遠ざかってしまう。畳堤の効果を技術的にどう評価しているかを聞きたい。

国土交通省のパンフレットにも畳堤について記載されており、これを一般市民が見た場合、おそらく畳堤は水害の防御に役立つと思うだろう。また極論を言えば、今行われている畳堤の補修工事は無駄で、そのために費用を使っているということになる。一番の問題はそこで、そのあたりを教えてほしい。

(河川管理者による回答)畳堤の部分は堤防そのものではないが、洪水時に今の堤防の高さを超えた水位になったとき、水防活動の一環として堤内地を守るために設置している。したがって、今後もそういう機能を果たせるよう補修している。機能としては、きっちりとした堤防をつくれれば、一番安全であるが、地域の方々の思いで50数年前に現在のような整備がされた。なお、洪水が発生し、実際に畳堤に畳を入れたという実績は、揖保川の場合はない。

畳堤の機能について、河川工学上どうかというデータはないのか。

(河川管理者による回答)実際に使ったことがないのでどれくらい耐えられるかは言えないし、洪水が長期間継続すれば畳が耐えられなくなることがないとも言えない。きっちりとした堤防をつくるのが一番安全ではあるが、地域の方々が水防活動として畳堤をつくることを選択され、河川管理者もそれに賛同して整備したという経緯がある。

治水のあり方として、まず河道での対策があり、もう一つは流域の水の貯留能力を高める対策、つまり一気に川に水が流れ込まないようにすることが必要であるとあり、まさにそのとおりだと思う。章の治水のところには、「(5)治水事業に関わる部局間の連携・調整」(No.345)について列挙してあるが、この中に流域の浸透・貯留能力を高める対策が抜けているように感じる。「(6)都市部局・環境部局」(No.359)のところ、道路や駐車場の舗装を浸透型にしていくこと、公共施設に何トン以上の貯留槽を設けるということ、民間の建物でも一定規模以上のものは貯留槽を義務づけことなどをここで入れるべきではないか。

章の自然環境のところの「(3)流域での取り組み」の中に「1)水量・土砂の適正化」(No.424)という項目があるが、土砂流出を抑制する方策をここに入れたほうがよいのではないか。土砂の堆積は全国の川で問題になっており、その対策を先駆的にやった矢作川で考え出された工法がある。

森林と川との関係について提言のたたき台の中に記述されていると思うが、川と海の関係に関する記述が見当たらない。揖保川は流域だけでなく、播磨灘の生態系にも深い影響を与えており、生活面で内陸のゴミが家島に押し寄せるといったような環境問題も引き起こしていると聞く。提言に海との関係を記述し、全体として整備していくということも重要なポイントではないかと思う。

流域の市町から国に対し、揖保川の支川をうまく使って町の水辺の遊歩道を整備したい、揖保川と連携してもっと商店街を活性化したいといったことを、なかなか提案できていないのではないか。流域市町が揖保川と自分たちのまちとの関係に取り組むチャンスとなるよう、河川整備計画の中で流域市町のまちづくりネットワーク等を提案できるような内容があればよいのではないか。

従来の考え方では、河川整備は川の中だけですればよいのだが、今の社会は単独で物事を考える時代ではなくなっており、周辺も含めた揖保川の河川計画をつくることができれば、流域における揖保川の存在がますます重要になるのではないか。揖保川の境界線を越えたまちづくりとの連携についてのヒントを河川整備計画の中で芽だしできればよいのではないか。

#### 提言の広報・PR方法について

かためのシンポジウム、意見交換会、記者会見では、地域の話題として効果を上げるのは難しいかもしれない。流域では子供たちが揖保川の研究や勉強をよくやっているの、そうい

う子供たちを集めた発表会形式のものをシンポジウムと一緒にやってみて、「将来の揖保川を語る」というイベント形式のものを考えていくと、地域性や話題性が高くなるのではないか。

こういう提言が出たときには、記者会見をするのが慣例である。やり方の問題、中身の問題もあり、面白いものがあればメディアが大きく報道し、社会的認知度も高まる。したがって、この提言の中でニュースとしてどういうところにポイントがあるのか、これは面白い、意義があるということ、まとめるときに考える必要があるのではないか。また、同時にもう少し幅広い意見発表会などメディアだけでなく流域の人たちに発信していくことを加えていけばよい。具体的に何をすることももう少し検討してもよいのではないか。

河川内のことだけでなく、町と川を絡めていく必要があると思う。例えば、河川と関わりのない商工会議所等にも呼びかけ、自発的に来てもらうことも考えていってはどうか。

委員会の議題の一つとして提言の発表の仕方を検討し、意見うかがう必要もあると思う。

今は具体的な計画が出される前に提言の議論をしているが、河川整備計画の原案が出たときにはかなり具体的なものが盛り込まれてくる。そうすると、もっと違う議論が委員会では出たろうし、住民、自治体、事業者の方も含めて、もっと大きな関心を持ち、いろいろな意見が出されるのではないか。そこは、今後の流れに応じて考えていかなければならない。

### 3. 傍聴者からの発言

3名の傍聴者から次のような発言がありました。

「川づくりフォーラムin岐阜」というフォーラムがテレビで放映されており、この中で今の子供たちが川で遊べない、遊ばないというのは、学校教育や親、家庭での教育も関係しているということであった。子供の命を大事にすることが行きすぎているという現状があり、もっと子供たちが遊べるような川にしようではないかということだった。兵庫県内には揖保川流域委員会と円山川流域委員会があり、どちらが主催されてもよいので、このような川づくりフォーラムのようなものをしていただきたい。また、パネリストには行政の担当の方に入っていただきたい。

ニュースターに「揖保川流域委員会とは」という記述があり、河川整備計画の原案について意見を述べる、関係住民意見の反映のあり方について意見を述べると明確に示してある。しかし、本日の提言のたたき台の表紙に、「揖保川河川整備計画原案提示の前にこれまでの審議内容をもとに・・・「提言」を作成する」ということがうたっており、これからすると話が違わないか。また、「揖保川を語り、生かす集い」の山崎会場での傍聴者が16名、本日の分科会の傍聴席が20名ほど、流域の自治体からの参加は1名だけとなっている。なぜ自治体の方が出てこれないのかということを知りたい。

網干・余部地区で揖保川についてのアンケートをとったが、河川敷の利用について、サイクリングロードや遊歩道等をつくってほしいという住民からの意見が多くあった。加古川の下流部でマラソンコース、遊歩道などがあり、そういう影響もあると思うが、揖保川の場合、加古川とは違った川ではないかと思う。揖保川の下流には珍しいハゼやテナガエビなどが棲んでおり、西播最大の鳥類の越冬地になっていること、フクドという貴重な海岸植生があることなどを専門家の方に教えていただいたが、これらの自然をどう生かし、こういうものをどう残していくかということが大事ではないかと思う。また、川のまちづくりという話が出てきたが、一つ目に川を知る・学ぶ、二つ目に水と仲良くすることだと思ふ。そのためには住民どうしの連携で情報をどんどん公開し、川と親しむことのできる、本当に住んでよかったなと思えるような川を整備してほしい。それから、提言のたたき台には「緑」という言葉が非常に少ないが、緑をどう河川整備に生かしていくかということも整備計画において大事ではないか。